

# 学会だより No. 85

2007年6月1日

発行：上智大学哲学会

〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町7-1 上智大学哲学研究室内

TEL：03-3238-3801 FAX：03-3238-4414 郵便振替：00140-8-194788

## 第66回哲学会大会のお知らせ

今夏は下記の要領で第66回上智大学哲学会大会を開催いたします。万障お繰り合わせのうえご出席くださいますよう、ここにご案内申し上げます。

日時：2007年6月30日（土） 13：30～17：00

会場：上智大学7号館14階特別会議室

## プログラム

研究発表 13：30～15：30

佐良土茂樹（本学博士後期課程）

アリストテレス『ニコマコス倫理学』におけるエウダイモニアと友人

桑原光一郎（本学博士後期課程）

トマス・アクィナスの公正価格論  
倫理学的問題としての価格

木村恵子（本学博士前期課程）

『純粹理性批判』における理性の関心の位置づけ

講演 15：45～16：45

樽井正義（慶應義塾大教授）

生活保護と開発援助が義務である理由  
カントの社会哲学をてがかりに

懇親会 17：30～19：30

会場：上智大学11号館7階第3会議室

会費：3,000円

## 講演要旨

### 生活保護と開発援助が義務である理由

#### カントの社会哲学をてがかりに

樽井正義（慶應義塾大教授）

国民の生活を保護する義務が、政府にはあるのか。カントははっきりと「ある」と答えている。さらに、途上国の開発を援助し、もってその国民の生活を保護する義務が、先進国の政府と国民にはあるのか。18世紀の哲学者はこれに直接には答えていない。しかし、やはり「ある」と答えることができるように思われる。

20世紀後半の世界は東西対立によって特徴づけられる。いわゆる西側の自由主義経済諸国は、国内においては高度に産業化を遂げる過程において、社会福祉政策の導入をはかった。国際的には、対立する東側陣営と競い合っ、旧植民地である途上国への開発支援を進めた。しかし、世紀の終盤における東欧社会主義政権の崩壊、すなわち競争相手の脱落によって、自陣営に取り込むという動因は希薄になってきている。また国内においても、財政の逼迫と自由主義的経済の促進を理由に、福祉は後退させられている。

21世紀を迎え、生活保護も開発援助も、より一層求められてはいるが、応えられてはいないように思われる。しかしそれらはともに、私たちには対応する義務のある社会的政治的課題である。このことをカントの社会哲学に即して考えてみたい。

## 研究発表要旨

### アリストテレス『ニコマコス倫理学』におけるエウダイモニアと友人

佐良土茂樹（本学博士後期課程）

アリストテレスによれば、徳に基づく活動こそエウダイモニア（通常は幸福と訳される）である。その活動の内実は、観想や有徳な行為にほかならない。しかし、それを実行するために必要な要素も幸福論の考察の対象に必須のものとして含まれる。それは、外的な善として挙げられる友人や富や政治的な地位である。その中でもアリストテレスは友人を重要視している。他の外的な善とエウダイモニアの関係は必ずしも明らかにされていないが、友人に限ってはその内実を明らかにしている（『ニコマコス倫理学』第九卷第九章）。

本来エウダイモンな人は自足的であるにもかかわらず、独力では提供できないものを友人は提供する。本発表においては、一方では外的な善として挙げられている友人の概念を概観したうえで、「何故エウダイモンな人には友人が必要なのか」という問いに対するアリストテレスの論述に含まれている重層性を見ていく。すると、友人は徳に基づく活動に従事するために必要なものであると同時にエウダイモニアを実現する契機としての側面を持つことが分か

る。幸福の実現は善い友との共同によって可能となる。さらに、友人の存在は個人ではなしえない事業の遂行というだけでなく、エウダイモンな人は友人をもエウダイモンにすることができる。友人の内に観想と有徳な行為を見出すからであり、逆にその友人もそれらの活動を自らのものとしうるからである。それによって、アリストテレスは友愛論を通じて、エウダイモンな人は友人を自らに似たエウダイモンな人にし得ると考えているという結論を得ることになる。また、友愛論を通じてアリストテレスのエウダイモニアの概念が補完されるといふ点が、倫理学と政治学の接点としての『ニコマコス倫理学』の外枠にとって、重要な点であることを示す。

\*

### トマス・アキナスの公正価格論 倫理学的問題としての価格

桑原光一郎（本学博士後期課程）

近年の経済史的研究によると、十三世紀のイタリアは未曾有の経済発展を遂げていることが明らかである。その一つの要因として貨幣経済の浸透が挙げられる。その意味で、イタリアを中心とする十三世紀のヨーロッパの地域では、経済的な問題が一つの指標として議論すべきものとなった。とりわけ、それは売買における価格形成である。そこには、偽りなく価格が形成されて売り手と買い手の利益となりうるかという倫理学的な視点が含まれていた。これが中世の経済問題である公正価格論の共通な基盤である。

本発表においてはトマス・アキナスの公正価格論を考察する。トマスにおいて価格は何に基づいて形成されたものであるのか、そして、価格はどのような目的のために形成されるのかを論じる。

トマスの公正価格論の解釈に関しては、以下のような問題が存在する。まず、価格形成の要因であるが、それは売買する側の主観的効用に基づくという解釈と、物財の側に存する価値に基づくという解釈である。他方、価格形成の担い手であるが、それは市場で決定されるものであるのかそれとも法定価格であるのか、という解釈である。こうした先行研究はある種の経済学的立場に依拠した経済学史的な観点からの解釈が多い。しかし、現代の経済学とトマスの問題座標は大きく視点を異にしている。

それに対して、本発表はトマスのテキストそれ自体を精読することから、トマスにおける公正価格論の意味を問うものである。トマスは売買を交換正義の問題として捉える。そこでは事物と事物の均等化が問題とされ、その実現が売買である。そのために価格が必要とされるのであるが、価格は生産者の労働と費用によって形成される。そこで言われている労働と費用とは、人間的行為の所産である。つまり、トマスの公正価格論は人間的行為を基盤にしているのである。

\*

## 『純粋理性批判』における理性の関心の位置づけ

木村恵子（本学博士前期課程）

カントの『純粋理性批判』の中で「関心」概念が最初に使用されるのは、「超越論的弁証論第三節、これらの抗争における理性の関心について」であり、人間理性が不可避に陥ってしまう純粋理性のアンチノミーについて語られた直後にあたる。この箇所以降、「関心」概念は、思弁理性が統制的使用に限定される「弁証論の付録」、超越論的意図のもとで多様な学を構成するための計画が語られる「超越論的方法論」で多用される。それらの「関心」概念の使用は多義的である一方、特定の箇所に集中して用いられていることからみても、意図的に使用された術語と考えられる。

本発表では超越論哲学における「関心」概念に注目しながら、なぜカントが批判の要となるアンチノミー論の直後で「関心」概念を多用したのかについて考察したい。ハイムゼートの解釈によれば、カントは相反する理性の関心の抗争に絶望したことから、その抗争を調停するために理性使用を統制的な使用に制限し、あらゆる関心から離れた第三者的な判断者を要請したとされる。そこでは、ホッブスに代表されるような、利害と混同された人間の欲望を示す「関心」のみが人間の関心のあり方として前提されているので、抗争する各々の関心を調節するために不偏不党と公正な裁判に委ねられるべきだという結論に至るのである。しかし反対に、「超越論的弁証論」における理性の「関心」の抗争とそれを統制的使用に限定することは、別のカントの意図を前提したものにすぎなかったとも考えられる。つまり、理性の抗争と理性使用の統制的使用という制限は、「超越論的方法」において新たに別の理性使用を示し、利害とは切り離された人間の「純粋な関心」を当事者の表象において想定することによって、別の世界を構成していくための前提にすぎなかったのではないかということである。そのように考えれば、あらゆる関心からはなれた第三者的な判断者ではなく、当事者性を維持した高次の純粋な関心が要請されることになるといえるだろう。

さらには、『純粋理性批判』における「関心」を考察することから、純粋理性の二重性を生じさせる自然本性としての形而上学のみを扱う「超越論的弁証論」と、学としての形而上学全般を扱う「超越論的方法論」との有機的連関が示されれば、「方法論」の積極的意義と、そこで語られるカントの学問論における「関心」概念の身分を究明するための展望が開け、今後の「関心」論への寄与が期待できると思われる。